

数字に対する要求では、階層による差より地域による差が大きく、「百以上の数を入学前に知っておかなくてはならない」と答えたものがAグループとB、Cグループとはかなりの差がみられ、BグループとCグループ、つまり東京都のグループ間には有意差は認められない。このように階層差がみられないのは、低い階層においては日常の生活の中に案外多く数と接する機会が多い為ではないかと考えられる。

字に対する要求では、数の場合と異り、地域差より階層差が大きく、AグループとBグループの間にも一応の差は認められるが、BグループとCグループの間の差が最も大きい。字の場合は数と異り、生活の文化的水準の差が最もはっきりあらわれたものとみられる。

結び これらの結果からもみられるように、母親の幼児に対する期待や態度も、母親の属する所属集団によりかなりの差がみられる。これらの差が将来社会的性格というものの階差による差、地域による差を作り出してゆくものと考えてよいのではなからうか。

(大会発表論文抄録85「87頁)

## 親の育児態度と幼児のパーソナリティに関する心理学的研究(その1)

(親の態度の変容性について)

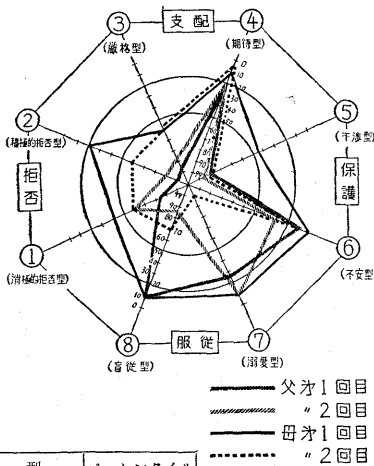
京都・立命館大学 守屋光雄  
 姫路工業大学 釘宮冨子  
 神戸・幼年教育研究 辻本弘明  
 所付属幼稚園 和田世子・岡宗美枝子

幼児期の性格形成に心理的環境としての親の態度は極めて重要な要因を含んでいる。われわれはこれらの親子関係の諸要因の一つとみなされる親の態度の変容性について測定、同時に幼児の人格形成との関連性を考察しようとする。

手続きとしては、対象に神戸・幼年教育研究所付属幼稚園一年保育児を選び、田研式親子関係診断テストを使用。保育者を通じて両親に配布。調査は一九五九年五月、一九六〇年三月の二回。調査人員は男児三十三例、女児三十九例。社会経済的に中流のものが多く、商業、技術業、事務的職業が大部分で少数が専門的職業。

結果 調査I(五月施行のもの)、調査II(三月施行のもの)の各類型別得点をパーセントイルに換算し、ついでこれらの基礎資料よりの頻数分布状態より大体の傾向を求め、一方、調査I、IIの変容性を探るためにそれぞれのパーセントイルをT得点に換算し、各類型ごとの平均値、標準偏差を求めてt検定を行なった。(抄録第二表

よくなった例(調査Iよりみた調査IIの%Δ変容をダイヤグラムで表す)



| 型        | パーセントイル |
|----------|---------|
| 9. 矛盾型   | I 0     |
|          | II 45   |
| 10. 不一致型 | F 15    |
|          | M 30    |
|          | F 0     |
|          | M 50    |
|          | F 0     |
|          | M 60    |

P 91参照)ただ調査Ⅰ、Ⅱを通じて殆んどの類型が五〇パーセント以下を示しているのが目だつ。即ち、内容的には調査Ⅰにおける厳格、期待型を除くすべてに、また調査Ⅱにおいては積極的拒否型、厳格型、期待型を除くすべてに比較的著しい問題を認めた。しかし調査Ⅰ、Ⅱの間には検定の結果殆んど有意差を認められなかったのであるから、入園当初から卒園時にかけての親の態度に著しい変容性が認められないわけである。

なお①親の態度が入園当初に比較して卒園時によくなくなったもの(五〇パーセント以上になったもの)②逆にわるくなったもの(五〇パーセント以下になったもの)③変らないケースについての事例的研究を紹介する。

まず①の例としてのⅠ児(♂)は五歳六か月、IQ一二四(京都・ビネー式テスト)、普通児、特に性格的にも問題はないが、入園当初の親の態度としては過度の不安、溺愛、盲従型が目だつ。これは両親の(特に母)本児に対する必要以上の能力への過信期待があり、(文字をよんだり数をかぞえたりすることの要求)それらが卒園時には矯正された例とみることができよう。(図一参照)

反対に②の例として典型的なR子(♀)は五歳五か月、末子で三年保育児である。IQ一〇九。年少組での保育期間中は甘えっ子であったが卒園間際では問題は認められなかった。しかるに両親の態度としては調査Ⅰでは問題を認めずかえって調査Ⅱにおいてのぞましくない方向に変容を来したのは、もっぱら進学を控えての不安、動揺が表示されたものとして注目されるものである。

③の例としては、〇児(♂)五歳七か月があげられる。この例は本人自身に身体的な欠陥があり、(虚弱体質、斜視、始終消化不良をおこす)加えてIQ八〇で知能的にも問題を有しているにかかわら

ず、親の態度は調査ⅠⅡを通じて危険範囲に停滞している。従つてこのケースは如何に本児の実体を認識せしめ、親の態度の問題性を自覚せしめるかにかかつており、現在小学校とも連絡をとり継続観察を怠らない。

要約 この調査のみで断定的な結論や考察を下すことは出来ないが、親の育児態度に問題性が多く、各類型の平均パーセントイルが低い)なかならず、不安、溺愛、盲従型が多い。しかも調査Ⅰ、Ⅱの間には有意差が認められないことから幼児教育にあたって両親教育の必要性が痛感させられる。(大会発表論文抄録91-92頁)

## 農村児童の性格と家庭

日本女子大学 児玉 省

小佐野 和子

高神 弘子

過去数年にわたつて国内各地域の農村の家庭とその子どもを自然環境、生産関係、子ども同志の交友関係及び子ども自身の生活様式、態度において把握すべく試みてきた。現在までのところ北は宮城県仙北、山形県庄内、関東は埼玉県箕田村、中部で長野県八ヶ岳山腹、西部で岡山県興除村と茶屋町、四国香川県高松市郊外、愛媛県松山市郊外、大洲市郊外等九ヶ村の児童小学四年または五年、六年、中学一年、二年の四学年を五十名ずつ各地域約二百名並びにその家庭の親を各地域百乃至二百名について主としてアンケートにより、また各地域約十軒をくわしく面接調査した。我々は今まで上述の地域別に子どもの家庭環境、しつけの方針、親の持つ子どもの理想